■論　文■

ソーシャルワーカーのナレッジベース（Knowledge base）に関する一考察
―ソーシャルワーカーの多様な知識のあり方の理解に向けて―

浅　野　貴　博*

抄　録

本稿では，先行研究のレヴューを通して，ソーシャルワーカー（以下 SWer）が専門職としての判断を下す際に用いるナレッジベースに関する議論について概観した。SWer のナレッジベースはフォーマルナレッジとインフォーマルナレッジに大別することができるが，近年の EBP が重視される潮流の中で，一貫性を欠く実践につながり得る，個人的経験に基づくインフォーマルナレッジに頼るのではなく，科学的に確立された知識であるフォーマルナレッジを用いることが強調されている。しかし，SWer の多様なナレッジベースを理解するには，両者をそれぞれ「相反する」ものではなく，「相補的な」ものとして捉えることが重要である。さらに，実際の支援の文脈の中で行う判断は，SWer が専門職として何に重きを置くかという「価値」の側面を伴うことから，プラクティカル・モラルナレッジを含むホリスティックなものとして SWer のナレッジベースを理解することが必要である。

Keywords：ナレッジベース，フォーマルナレッジ，インフォーマルナレッジ，プラクティカル・モラルナレッジ，ソーシャルワーカーの専門性

Ⅰ．はじめに（本研究の視座）

近年，社会福祉関連法制度の改革が相次ぐ中で，福祉現場の最前線で支援に携わるソーシャルワーカー（以下 SWer）は複雑化そして多様化する福祉ニーズに対応すべく，専門職としてその力量を向上させることがますます求められている。職能団体である日本ソーシャルワーカー協会や日本社会福祉士会の倫理綱領においても，「専門性」の向上の必要性が規定されており，SWer がそのキャリアを通して，職能団体や自治体，大学等によって提供される現任教育・研修に関わり続けることは専門職としての要件となっているといえる。日本社会福祉士会は，社会福祉士を対象とする生涯研修制度の目的について，「社会福祉士の職務に関する知識及び技術の向上，倫理及び資質の向上のために，生涯にわたって研鑽を重ねることを支援する」こととしている。こうした現任教育・研修システムの前提には，研修プログラムへ

＊ Asano, Takahiro
ルーテル学院大学総合人間学部　人間福祉心理学科

の参加を通して，専門職としての“不十分な”知識や技術を向上させる必要があるという考え方があることが指摘できる（Coffield, 2007; Webster-Wright, 2009; McWilliam, 2002）。しかしながら、職場等における学びを指すインフォーマルな学び（Informal learning）[1]への関心の高まりとともに，現任教育・研修システムに代表されるフォーマルな学び（Formal learning）に対して，専門職が実際に知識や技術を用いる現場の文脈とはかけ離れたものであるという批判がなされ（Brown et al., 1989; Brown and Duguid, 1991），近年では，インフォーマルな学びが専門職の学びを理解する上での重要な鍵となっていることが指摘できる（Dall'Alba and Sandberg, 2006; Evans, 2008）。

では，SWer は実際の支援現場において，どのように専門職としての知識や技術を用いて支援活動を行っているのであろうか。SWer は日常の支援活動の中で，それぞれの文脈に応じて専門職として様々な判断を行うことが求められるが，そうした判断は自らのナレッジベース（knowledge base）を基にして行われる。SWer のナレッジベースが何で構成され，それがどのように活用されているかという問いに関しては様々な立場が存在しているが（Trevithick, 2008：1212），この問いは，SWer が専門職としてどの形態の知識を用いるべきかという議論と関連している。Sheppard（2004：18）は SWer のナレッジベースに関し，「何が知識を構成するのかというのはいくらかの不同意を伴うことであり，そのことはどの形態の知識がいつ，どのように用いられるかを考える上で重要な問題を生じさせる」と指摘している． SWer のナレッジベースが何で構成されているか，さらにそれがどのように用いられているかという問いを考えることは，上述の現任教育・研修への参加を通して向上させることが期待される，SWer の「専門性」を考える上での示唆を与えてくれるであろう。

本稿では，先行研究のレヴューを通して，SWer が実際の支援の文脈の中で，専門職としての判断を下す際に用いるナレッジベースに関する議論について概観する。

Ⅱ．ソーシャルワーカーのナレッジベース

SWer のナレッジベースは，それぞれの支援活動の文脈の中で形作られ，多様なソースから構成されているが，フォーマルナレッジ（Formal knowledge）とインフォーマルナレッジ（Informal knowledge）に大別することができる。フォーマルナレッジが，科学的な方法で確立され，明示的な形で表される知識を指すのに対して，インフォーマルナレッジは，様々な個人的経験に基づき暗黙の形を取るため，フォーマルナレッジのように明示化することが難しい知識を指す。このフォーマルナレッジとインフォーマルナレッジという２つの異なる形態の知識に関して，両者は調和することが可能かという長く続く議論があるが，これはソーシャルワークの文献で繰り返される「理論」と「実践」の乖離というテーマと結びつけることができる（Longhofer and Floersch, 2012; 2014）。以下，先に述べた，SWer が専門職としてどの形態の知識を用いるべきかという問いと関連させて，それぞれのナレッジについて順にみていくことにする。

１．フォーマルナレッジ（Formal knowledge）

まず，SWer が専門職として用いる知識としてフォーマルナレッジを重視する立場からは，SWer が“科学的に”確立された知識に基づいた支援活動をすることが強調される。この立場においては，ソーシャルワーク実践が科学的知識に基づいていないことが，対人援助職の中での SWer の相対的な専門性の低さにつながっているとみなされ，科学的知識，すなわちフォーマルナレッジをベースにした支援活動をすることが，SWer の専門性を確立する上で最も重要なことであるとされる（Gambrill, 2007; Gibbs and Gambrill, 2002; Sheldon, 2001; Thyer, 2004; 2008）。そして，こうした考えが近年の大きな潮流となっているエビデンス・ベースド・プラクティス（以下 EBP）の基底をなしているといえる。Sackett et al.（1996：

71）は，エビデンス・ベースド・メディスン（EBM）をそのルーツに持つ EBP について「患者一人ひとりのケアについての判断をする上で，その時点で最善のエビデンスを入念に，明示的に，そして慎重に使うこと」であると定義している。Sheldon（2001）は，専門職としての判断をする上でベースとなるエビデンスに関し，規範的な科学的方法であるランダム化比較試験（Randomised controlled trial：RCT）によって介入の効果が証明されたものに重点を置くべきであるとしている。こうした見方の前提には，エビデンスに関するヒエラルキーがあることが指摘できる。そのヒエラルキーの下では，RCT が最上位にランクされる一方で，観察，解釈的（interpretive）及び記述的（descriptive）研究，すなわち質的研究は下位にランクされ，ケーススタディが最下位に位置付けられている（Evans, 2003）.

また，フォーマルナレッジを重視する考えの前提に，科学的に確立された専門的なナレッジベースを持つことで，専門職が社会において一定の地位を得ることが可能になるとする見方があることが指摘できる（Dingwall and Lewis, 1983）。この見方からは，ソーシャルワーク実践は理論的な厳密さを欠く，個人の価値に基づいた（value-based）判断に依っていることに対する厳しい批判が投げかけられる。これらのことから，フォーマルナレッジをより重視する立場においては，ソーシャルワーク実践は EBP が重視される大きな潮流の中で，一貫性を欠く実践につながり得るインフォーマルナレッジに頼るのではなく，科学的に確立された知識であるフォーマルナレッジを用いることで，専門職として行う判断の根拠を明らかにすることが強調される。それがインフォームド・プラクティスにつながり，その結果として，専門職としてのアカウンタビリティを高めることにつながるとしている（Gambrill, 2007; Nutley et al., 2003）。

2．インフォーマルナレッジ（Informal knowledge）

一方，SWer が用いる知識としてインフォーマルナレッジを重視する立場からは，上述のように，専門職として用いるべき知識はフォーマルナレッジであるとし，科学的に確立された知識ではないインフォーマルナレッジを軽視する見方に異議が唱えられる。この見方においては，SWer が日常の支援現場で様々な判断をする上で用いるのはフォーマルナレッジだけではなく，インフォーマルナレッジを含む幅広い知識が用いられていることが強調される（Evans and Hardy, 2010; Parton, 2000; Payne, 2001; Scourfield and Pithouse, 2006）。Gray et al.（2009: 13）が「エビデンスは知識の一形態であるが，それだけに過ぎない」と指摘するように，インフォーマルナレッジを重視する見方の前提には，科学的に確立されたフォーマルナレッジだけでは実践の複雑なリアリティは捉えられないとする考えがあることが指摘できる。 Eraut（1994: 54–55）は，専門職のナレッジベースについての我々の見方を広げる必要性について以下のように指摘する：

> 知識は今もなおリサーチ・コミュニティのみの基準を下に体系化され，発表され，そして周知される。プロフェッショナル・ナレッジの創造について研究するには，より広い枠組みが必要である。（～）我々は，非体系的な個人の経験がどの程度知識の創造のプロセスに影響を与えているかを過小評価すべきではない。

個人的な経験に基づく知識であるインフォーマルナレッジは,「プラクティカル・ナレッジ（practical knowledge）」（Clandinin and Connelly, 1987），「プラクティス・ウィズダム（practice wisdom）」（Scott, 1990），「プロフェッショナル・アーティストリー（professional artistry）」（Schön, 1983）），「クラフト・ナレッジ（craft knowledge）」（Calderhead, 1987）など様々に呼ばれる。これらの用語にはそれぞれ違いが認められる一方で，これらに共通するのは，フォーマルナレッジこそが専門職が用いるべき知識の中心であるとする見方

への異議申し立てである。インフォーマルナレッジは，専門職としての経験のみならず，個人的な経験を含む多様な経験から得られた知識であり，先に述べたように本質的に暗黙の形を取るため，フォーマルナレッジのように形式化することが難しい。フォーマルナレッジを重視する見方においては，明示的なエビデンスに基づいた合理的な判断をすることが強調されるのに対し，インフォーマルナレッジを重視する見方からは，判断をする際の拠り所として「直観（intuition）」が大きな役割を果たしていることが強調される（Schön, 1983）。

ここまでみてきたSWerのナレッジベースに関する二つの異なる見方は，ソーシャルワーク分野において長く続く「サイエンス vs アート」の論争とパラレルであるといえる。Hugh Englandは，ソーシャルワーク分野においてインフォーマルナレッジに関する古典といえる『Social Work as Art』（1986）の中で，SWerは「アーティスト」として捉えられるという点で，ソーシャルワークを「アーティスティック・アクティビティ（artistic activity）」であるとしている（p.83）。Englandはソーシャルワーク実践において，SWerの「直観的な自己の活用（intuitive use of self）」を強調し，SWerはそれを通してサービス利用者の抱える困難を理解し，さらにその困難にポジティブな変化をもたらすとしている（p.83）。ここで，インフォーマルナレッジを重視する見方を理解する上での重要な鍵が，ソーシャルワーク実践の“アーティスティック”または“クリエイティブ”な側面により重きが置かれていることであることが分かる。こうした見方においては，Englandが「有能なSWerは，自らの経験を通して自らの支援活動の価値を理解している」（p.4）と述べるように，専門職としての個人的な力量がサービス利用者との支援関係を築く上で重要なこととみなされる。

このようにSWerが専門職として用いる知識として，インフォーマルナレッジである個人的な「直観」により重きが置かれると，フォーマルナレッジは過小評価され，実践で何が効果があったのか，なかったのかについては明らかにされないままという結果を導きやすい。さらに，SWerの専門性に関して，現場経験に基づいた個人的な「直観」に価値が置かれると，SWerの専門性は明らかにされることなく，SWer個人の特有な能力という，いわば“神秘的な”ものとして扱われることにつながり得る。これに対して，Shaw（2012：54）はソーシャルワーク実践の性質をアーティスティック，または感覚的な（aesthetic）ものとして捉えることに疑問を呈し，リフレクティブ・プラクティスを通して多様な暗黙知（tacit knowledge）を認識することが，暗黙知に対する「ロマンティックな」見方を避けることにつながることを指摘している。そして，日々の支援活動の中で用いられる多様な暗黙知を認識することが，「SWer同士の間で共有されている個人的な関わり（personal contact）やプラクティカル・ナレッジの重要性を明らかに」し，また，サービス利用者との信頼関係を築く上での具体的な手掛かりを明らかにするとしている（同上，p.54）。

３．ソーシャルワーカーの多様なナレッジベース

1）ナレッジベースの相補性

ここまでSWerのナレッジベースに関して，フォーマルナレッジとインフォーマルナレッジに分けて概観してきた。Evans & Hardy（2010：114）は，SWerのナレッジベースをフォーマルナレッジとインフォーマルナレッジの二つに分けると，両者は「相反する（competing）もの，または相補的な（complementary）もののどちらか一方の見方で捉えられる」と指摘している。フォーマルナレッジとインフォーマルナレッジの両者を「相反する」ものと捉えると，ここまでみてきたように，議論の焦点は「相反するシナリオの中で，どちらが上位であるべきか」という点に向けられる（同上，p.114）。SWerのナレッジベースをフォーマルナレッジとインフォーマルナレッジに分ける捉え方では，SWerが実際の現場で用いる多様な形態の知識を包含することはできないことから，Evans & Hardyは両者を「相反する」ものとし

てではなく，「相補的な」ものとして捉えることが必要であることを強調している（同上，p.114）。そうした捉え方をすることが，多様なSWerのナレッジベースについての理解を深めることにつながる（Parton，2000; Payne，2001; Sheppard, 1995; Webb, 2001）。Scourfield & Pithouse (2006) は，SWerのナレッジベースを「professional knowledge」と，それと対比的な一般的知識を指す「lay knowledge」に分けた上で，実際の支援の文脈の中では両者が組み合わされて支援活動が行われていることをエスノグラフィー調査を通し明らかにしており，両者の関係について次のように指摘している：

> 専門的知識の役割は，サービス利用者の生活に影響を与える上で，所属組織の文化の中で専門的知識と一般的知識が組み合わされたものよりも，実践を導く際の重要性は相当低い（p.324）。

SWerの幅広いナレッジベースを理解することの重要性を指摘するこれらの研究に関連して，Pawson et al.（2003）はSWerが実践現場で用いる多様なナレッジベースを明らかにしようと試みて，以下の5つのナレッジに分類した：

- 「組織的なナレッジ(organisational knowledge)」：ソーシャルワーク及びソーシャルケアのマネジメントから得られた知識
- 「プラクティショナー・ナレッジ（practitioner knowledge）」：実践への関与から得られた知識
- 「ポリシー・コミュニティ・ナレッジ（policy community knowledge）」：広範な政策的コンテキスト（文脈）から得られた知識
- 「リサーチ・ナレッジ(research knowledge)」：実践についての体系的な研究から得られた知識
- 「ユーザー及びケアラー・ナレッジ（user and carer knowledge）」：サービス利用者及びケアラーとの相互作用、そしてその経験についてのリフレクションから得られた知識

SWerのナレッジベースを明らかにしようとする同様の様々な試みが存在するが（e.g. Trevithick, 2008），こうした試みは，既に述べたように，フォーマルナレッジ，またはインフォーマルナレッジのどちらが上位かという議論を退ける限りにおいて，SWerの「複雑に入り組んだナレッジ」（Wilson et al., 2008：99）を理解する上で有益であるといえる。

2）プラクティカル・モラルナレッジ（Practical-moral knowledge）

ここまでSWerのナレッジベースは様々な形態の知識から構成され，それぞれの知識が相互に補い合うものとして捉えることが重要であることを述べた。しかしながら，SWerが実際の支援の文脈の中で専門職としての判断を下す際に，どのようにナレッジベースを用いているかについては依然として明らかにはなっていない。この問いを考える上で，Schwandt（1997）によって分類された3種類の知識が有益な示唆を与えてくれる。Schwandt（1997）は専門職の知識を「knowing that」，「knowing how」，「knowing from」の3つに大別した。1つ目の「knowing that」は理論的な知識を指し，2つ目の「knowing how」は技術的な知識を指す。そして，最後の「knowing from」はプラクティカル・モラル（practical-moral）に関わる知識を指す。Schwandtは「knowing from」について，「選択，熟慮，及び倫理的でプラクティカルな判断」（同上，p.77）として特徴付けられるとし，「単に人々に有益な考えを提示するだけではなく，実際に彼らの変化を促すことを目的にしている」と述べている（同上，p.81）。SWerはそれぞれの支援現場の文脈において，様々な関係者や関係機関・施設の利害が絡み合う中で専門職としての判断を行うことが求められる。そうした状況は，時にSWerにジレンマをもたらすが，そこでSWerが行う何らかの判断には，専門職として自らの依って立つ「価値」が様々な形で関わってくる。Howe（2014：164）は，「我々が行うことで，完全に価値中立（value-neutral）なことはほとんどない」とした上で，次のように述

べている：

> SWerがどれほど知っていたとしても，またどれほど彼らの技術が優れていたとしても，SWerは為すべきことについて決断しなければならない。そしてここに価値の問題が生じるのである（同上，p.164）。

このようにSWerが実際の支援現場の文脈の中で行う判断は，専門職としての「価値」に基礎付けられているといえる。Polkinghorne（2004）は，対人援助職における実践が価値に基づいた判断（value-based judgement）を伴うことを理解するための議論をさらに発展させている。Polkinghorne（2004）は，様々な対人援助分野においてEBPのムーブメントが大きな影響を与える中で，科学的に確立され，明示的な形で表されるフォーマルナレッジにのみ重きが置かれる状況に対して疑問を呈し，個人間の相互作用を通して行われる判断の重要性を強調している。個人間の相互作用は不安定で複雑であるが，「価値に結びついた（value-relational）行動は，それ自体が倫理的，感覚的（aesthetic），信仰的，または他の価値に関わるものを表現」しており，そうした価値に結びついた行動は「事前に決められた目的を達成するために行うのではなく，なすべきことであるから行う」（同上, p.37）としている。さらに，Polkinghorneはプラクティショナーの判断が，変化し続ける実践現場への「リフレクティブな理解（reflective understanding）」に基づいて行われる必要があることを強調した上で（同上，p.176），リフレクティブな理解に関して次のように述べている：

> リフレクティブな理解は，過去の個人的及び文化的な学びの統合，ある行動に対する反応について想定したシナリオの統合，そして，その状況において起こりうる行動についての感情的な解釈の統合を伴う。プラクティショナーは，リフレクティブな理解を通して，ある特定の状況における顕著な特徴に自らを順応させた上で，相互作用の中で起きている微細な変化に応答する（同上，p.176）。

SWerのリフレクション（reflection）に関連して，別稿[2]にて，実際の支援の文脈の中でリフレクションがどのように行われているかについて，SWerとしての学びであるプロフェッショナル・ラーニング（Professional learning）に焦点を当てて考察しているので参照されたい。

Ⅲ. おわりに：SWerの多様なナレッジベースの理解に向けて

様々な福祉現場の第一線で支援に携わるSWerは，事前に決められた，分かりやすい唯一の解決法が存在しないという状況の中で，専門職として様々な判断を下すことが求められる。彼らの支援活動は，ある特定の文脈（コンテキスト）を理解した上で，彼ら自身のナレッジベースをその文脈に応じて用いることから成る。ここまでみてきたように，SWerの実際の支援現場では，フォーマルナレッジは特定の文脈に合わせるためにインフォーマルナレッジと組み合わされ，適宜変更される。さらに，様々な関係者や関係機関・施設の利害関係が絡む中で下さなければならないSWerの判断は，彼らが専門職として何に重きを置いているかという「価値」の側面を伴う。 こうした多面的で複合的なソーシャルワーク実践を理解するためには，SWerのナレッジベースを様々な形態の知識がそれぞれ「相反する」のではなく，「相互に補い合う」ものとしてホリスティックに捉えることが重要である。Glasby（2011）は「ナレッジベース・プラクティス」に関してのより包括的な理解が必要であるとし，「理論的，実証的，そして経験から得た洞察（insights）の結合を目指すことが，ヘルス及びソーシャルケアにおける変化をもたらし，より良い判断を下すことにつながる唯一の方法ではないだろうか」（p.96）と述べている。

また，SWerのナレッジベースをホリスティックに捉えることは，SWerの専門性についての

捉え方の射程を広げることにつながる。そして，SWerの専門性を幅広く捉えることは，「Ⅰ．はじめに」で述べたSWerの現任教育・研修に関して，職能団体や大学，社会福祉機関・施設等を含むプロフェッショナル・コミュニティが立つ前提の考え方に対して疑問を投げかけることにもつながる。EBPの大きな影響の下，SWerによる支援の標準化が進められる中，SWerの現任教育・研修に関しても参加の義務化という形での“規制”が進められている現状がある（Beddoe and Henrickson, 2005）。そうした中で，プロフェッショナル・コミュニティが，研修プログラムの提供を通してSWerに向上を求める知識や技術と，SWer自身が専門職として重要視する学びとの間に大きなギャップが存在していることが指摘されている（Clarke, 2001; Smith et al., 2006）。浅野（2016）は，そうしたギャップの背景に「プロフェッショナル・コミュニティが，学びは組織の目標を達成するための手段としてコントロールすることが可能であるという前提に立つのに対して，支援者側には，規制が強まる一方で失われる専門職としての自律性への懸念がある」ことを指摘している。SWerの学びについてのこうしたギャップを小さくするためには，SWerのナレッジベース，並びにSWerの専門性について幅広い捉え方をする必要性をプロフェッショナル・コミュニティ全体で共有することが重要である[3]。

最後に，本稿の課題について述べたい。まず，本稿でレヴューしたSWerのナレッジベースに関する先行研究が，欧米の文献に偏っていることが指摘できる。今後の課題として，日本のソーシャルワーク分野における先行研究のレヴューを行い，本稿で概観したSWerのナレッジベースに関する議論と対比させることが挙げられる。さらに，それを踏まえた上で，SWerのナレッジベースについての理解を深めるための実証研究の方法として，社会福祉機関・施設におけるエスノグラフィー調査が有効であるといえる（Gherardi and Nicolini, 2006）。エスノグラフィー調査を通して，実際の支援現場という様々な制約がある環境において，SWer一人ひとりのナレッジベースがどのように形作られ，SWerが専門職としての判断を行う際にそうしたナレッジベースをどのように用いているかについての示唆が得られるかもしれない。

付記

本稿は，筆者がイギリスのヨーク大学（University of York）に提出した博士論文（Asano, T. (2015) Professional learning as a way of being a social worker: Post-qualifying learning among Japanese social workers）の一部を加筆・修正してまとめたものである．

引用文献

Asano, T.（2015）Professional learning as a way of being a social worker: Post-qualifying learning among Japanese social workers, Unpublished PhD thesis, University of York, UK.

浅野貴博（2016）「福祉現場における人材育成：支援者の学びを“マネジメント”することは可能か?」『さぽーと』（日本知的障害者福祉協会），63（5），21-23.

Beddoe, L. and Henrickson, M.（2005）Continuing professional social work education in Aotearoa New Zealand, *Asia Pacific Journal of Social Work and Development*, 15, 75–90.

Brown, J. S., Collins, A. and Duguid, P.（1989）Situated cognition and the culture of learning, *Educational Researcher*, 18, 10-12.

Brown, J. S. and Duguid, P.（1991）Organizational learning and communities-of-practice: Toward a unified view of working, learning, and innovation, *Organization Science*, 2, 40-57.

Calderhead, J.（1987）*Exploring Teachers' Thinking*, Cassell.

Clandinin, D. J. and Connelly, F. M.（1987）Teachers' personal knowledge: What counts as 'personal' in studies of the personal, *Journal of Curriculum Studies*, 19, 487–500.

Clarke, N.（2001）The Impact of In - service Training within Social Services, *British Journal of Social Work*, 31, 757–774.

Coffield, F.（2007）*Running ever faster down the wrong road: an alternative future for education and skills*, Institute of Education, University of London.

Dall'Alba, G. and Sandberg, J.（2006）Unveiling

Professional Development: A Critical Review of Stage Models, *Review of Educational Research*, 76, 383-412.

Dingwall, R. and Lewis, P. S. C. (1983) *The sociology of the professions: Lawyers, doctors and others*, Macmillan.

England, H. (1986) *Social work as art: Making sense for good practice*, Allen & Unwin.

Eraut, M. (1994) *Developing professional knowledge and competence*, Falmer Press.

Evans, D. (2003) Hierarchy of evidence: a framework for ranking evidence evaluating healthcare interventions, *Journal of Clinical Nursing*, 77-84.

Evans, L. (2008) Professionalism, professionality and the development of education professionals, *British Journal of Educational Studies*, 56, 20-38.

Evans, T. and Hardy, M. (2010) *Evidence and knowledge for practice*, Polity Press.

Gambrill, E. (2007) Views of evidence-based practice: Social workers' code of ethics and accreditation standards as guides for choice, *Journal of Social Work Education*, 43, 447–462.

Gherardi, S. and Nicolini, D. (2006) *Organizational knowledge: The texture of workplace learning*, Blackwell Publications.

Gibbs, L. and Gambrill, E. (2002) Evidence-Based Practice: Counterarguments to Objections, *Research on Social Work Practice*, 12, 452-476.

Glasby, J. (2011) From Evidence Based to Knowledge Based Policy and Practice, Glasby, J. (ed) *Evidence, policy and practice: Critical perspectives in health and social care*, Policy Press.

Gray, M., Plath, D. and Webb, S. (2009) *Evidence-based social work: A critical stance*, Routledge.

Howe, D. (2014) *The Compleat Social Worker*, Palgrave.

日本社会福祉士会 (2005)「社会福祉士の倫理綱領」(http://www.jacsw.or.jp/01_csw/05_rinrikoryo/index.html, 2017.2.20)

日本社会福祉士会「生涯研修制度の概要」(http://www.jacsw.or.jp/ShogaiCenter/toplinks/seido.html, 2017.2.20)

日本ソーシャルワーカー協会 (2005)「ソーシャルワーカーの倫理綱領」(http://www.jasw.jp/rinri/rinri.html, 2017.2.20)

Longhofer, J. and Floersch, J. (2012) The Coming Crisis in Social Work: Some Thoughts on Social Work and Science, *Research on Social Work Practice*, 22, 499–519.

Longhofer, J. and Floersch, J. (2014) Values in a Science of Social Work: Values-Informed Research and Research-Informed Values, *Research on Social Work Practice*, 24, 527–534.

McWilliam E. (2002) Against Professional Development, *Educational Philosophy and Theory*, 34, 289-299.

Nutley, S., Walter, I. and Davies, H. T. O. (2003) From Knowing to Doing: A Framework for Understanding the Evidence-into-Practice Agenda. *Evaluation*, 9, 125-148.

Parton, N. (2000) Some thoughts on the relationship between theory and practice in and for social work, *British Journal of Social Work*, 30, 449–463.

Payne, M. (2001) Knowledge Bases and Knowledge Biases in Social Work, *Journal of Social Work*, 1, 133–136.

Pawson, R., Boaz, A., Grayson, L. et al. (2003) *Types and quality of knowledge in social care*, Social Care Institute for Excellence.

Polkinghorne, D. E. (2004) *Practice and the human sciences: The case for a judgment-based practice of care*, State University of New York Press.

Sackett, D. L., Rosenberg, W. M. C., Gray, J. A. M. et al. (1996) Evidence Based Medicine: What It Is And What It Isn't: It's About Integrating Individual Clinical Expertise And The Best External Evidence, *BMJ: British Medical Journal*, 312, 71–72.

Schön, D.A. (1983) *The reflective practitioner: How professionals think in action*, Basic Books.

Scourfield, J. and Pithouse, A. (2006) Lay and professional knowledge in social work: reflections from ethnographic research on child protection, *European Journal of Social Work*, 9, 323–337.

Schwandt, T. A. (1997) Evaluation as Practical Hermeneutics, Evaluation, 3, 69–83.

Scott, D. (1990) Practice wisdom: The neglected source of practice research, *Social work*, 35, 564–568.

Shaw, I. F. (2012) Ways of Knowing in Social Work, *Practice and Reseach*, Ashgate, 51–64.

Sheldon, B. (2001) The Validity of Evidence - Based Practice in Social Work: A Reply to Stephen Webb, *British Journal of Social Work*, 31, 801–809.

Sheppard, M. (1995) Social Work, Social Science and Practice Wisdom, *British Journal of Social Work*, 25, 265–293.

Sheppard, M. (2004) *Appraising and using social research in the human services: An introduction*

for social work and health professionals, Jessica Kingsley Publishers.

Smith, C., Cohen-Callow, A., Dia, D. et al.（2006）STAYING CURRENT IN A CHANGING PROFESSION: EVALUATING PERCEIVED CHANGE RESULTING FROM CONTINUING PROFESSIONAL EDUCATION, *Journal of Social Work Education*, 42, 465–482.

Thyer, B. A.（2004）What is evidence-based practice?, *Brief Treatment and Crisis Intervention*, 4, 167–176.

Thyer, B. A.（2008）The Quest for Evidence-Based Practice?: We Are All Positivists!, *Research on Social Work Practice*, 18, 339–345.

Trevithick, P.（2008）Revisiting the Knowledge Base of Social Work: A Framework for Practice, *British Journal of Social Work*, 38, 1212–1237.

Webb, S. A.（2001）Some considerations on the validity of evidence-based practice in social work, *The British Journal of Social Work*, 31, 57–79.

Webster-Wright, A.（2009）Reframing Professional Development Through Understanding Authentic Professional Learning, *Review of Educational Research*, 79, 702–739.

Wilson, K., Ruch, G., Lymbery, M. et al.（2008）Social work: An introduction to contemporary practice, Wilson, K., Ruch, G., Lymbery, M. et al.（eds）*The development of social work: Key themes and critical debates*, Pearson Longman.

注

1　フォーマルな学びとインフォーマルな学びを分類することを試みた先行研究として，以下の研究が挙げられる：Marsick, V. J. and Watkins, K.（1990）*Informal and Incidental Learning in the Workplace*, Routledge.
Eraut, M.（2004）Informal learning in the workplace, *Studies in Cotinuing Education*, 26, 247-273.

2　浅野 貴博（2016）「ソーシャルワーカーとしての学びにおけるリフレクション：『今いるところ』から離れるために」『ソーシャルワーク学会誌』，33，13-25.

3　筆者は博士論文で，現任のSWerが専門職としてどのように学び続けているかについて考察するために，社会福祉士または精神保健福祉士を有し，10年程度以上の実践経験のあるSWerを対象に，インタヴューを中心とする質的調査を実施した。その結果，SWer自身の理解の変容を伴う学びであるプロフェッショナル・ラーニング（professional learning）が，1）経験，2）学びの機会，3）リフレクションの3つの要素から構成されていることが明らかになった。複雑で多様なSWerの学びを理解するには，これらの要素は別個に切り離されているのではなく，各々の要素が分ちがたく結びついたホリスティックなまとまり（unity）として捉える必要があることが分かった。

An Exploration of the Knowledge Base of Social Workers: Toward an Understanding of a Way of Diverse Knowledge in Social Workers

Takahiro Asano

This study examines different ideas of knowledge that social workers utilise as resources in their everyday practice. Social work practice involves practitioners taking multiple factors into consideration in making judgments in their working contexts. Their judgments as professionals are built upon a knowledge base derived from a diverse range of sources—which can often be broadly divided into “formal” and “informal” knowledge. It can be argued that the movement of evidence-based practice represents that professional practice which is informed by “formal” scientifically established knowledge, rather than relying upon “informal” knowledge, which may lead to inconsistency in practice. When we see different forms of knowledge as “competing” with one another, our focus is likely to try to decide which form should take precedence over the other. That stance may lead to a misrepresentation of the multidimensional aspect of activities that social workers undertake in their everyday working lives. By regarding formal and informal knowledge as “complementary” we may be allowed to understand the reality of the diverse range of the knowledge base of social workers. Also, social work practice can be intricately connected with value-based judgments to varying degrees—which leads us to the necessity of understanding how “practical-moral” knowledge plays an important role.

Keywords: Knowledge base, Formal knowledge, Informal knowledge, Practical-moral knowledge, Expertise of social workers